



四季

エッセイ

大阪土地家屋調査士会

会長 横山 慶子

もう20年ほど前になるだろうか。衣更えの季節に母が、四季折々に衣類の入れ替えや整理をしなくてはならないので本当に大変だと、家族の衣類を前にため息をつきながら、こぼしていたことがあった。

確かに、日本には四季があるので、季節が巡るたびに手間もかかり、その労力を考えると不経済であるとまだ若かった私も同感したものだ。

その後、結婚して、私自身も家族の分まで衣更えをするようになるにつれ、その実感は強くなる一方であった。

また、土地家屋調査士という職業がら外業が多く、現場で、夏は強い陽射しの中でのうだるような暑さ、冬は足もとから寒気があがってきて、全身が冷えていくという寒さの中で、寒いのも暑いのもイヤ、一年中ほどよい気候だとどんなに良いだろうと思ってきた。

ところが、いつごろからだろうか、測量現場で小さな楽しみを見つけられるようになった。

夏の照りつける陽射しの中から日陰に入った時の得も言われぬ涼しさ、お盆を過ぎると気温がどんなに高くても、吹く「風」が変わること。秋になるとあちこちに顔を出す柿、栗、みかんなどの天からの恵み。寒さの中で、鮮やかな赤で自己主張する椿。春には、桜のピンク、レンギョウの黄、雪柳の白と見事なコントラストを見せる花々たち……。

このように仕事を通じて、移り変わる季節をはっきりと、かつ誰よりも早く感じられることは、測量をする者の特権であるかもしれない。

清少納言は、枕草子の中で、それぞれの季節を愛で、その鋭い才気をもって、四季の情趣を書い

ている。

また、茶道の世界でも、季節により御点前は異なり、もちろん、生ける花も季節ごとの花であり、着物、帯の柄も、少し季節を先取りするのがおしゃれとされる。

このように、日本人は古しえから、四季を愛し大切にし、その移り変わりを楽しむことにより、心豊かな日々を過ごしてきた。

もしかしたら、このDNAは脈々と受け継がれ、一定の年齢になると発現するのかもしれない。

いずれにせよ、豊かな四季のある国に生まれた幸せ、その移り変わりを仕事を通じてはっきりと誰よりも早く感じられる幸せ、そして、DNAに四季を愛し楽しむことが書かれているかもしれない日本人であることの幸せを感じる今日この頃である。

唯一、残念なことは、華道を修めたはずなのにちっとも草花の名前を思い出せないことである。亡くなった母が、おけいこ代は無駄だったと天国で嘆いているかもしれない。

今年が、皆さまにとって良い年でありますように！